

戦前期

全2回配本・全8巻・附録1

沖縄一中 学友会雑誌集成

『球陽』『学友会雑誌』『養秀』

球陽
養秀
学友会雑誌

戦前沖縄のナンバースクールの
学友会雑誌を復刻!!

伊波普猷・眞境名安興・東恩納寛惇の三大沖縄学者、
ひめゆり学徒隊の引率教員でもあった仲宗根政善、
日本共産党初代書記長・徳田球一らを輩出した
戦前の沖縄教育の実態が明らかに!!

●底本

沖縄県立中学校／沖縄県立第一中学校学友会誌

『球陽』第14号～第21号(1905年～1912年)

『学友会雑誌』第23号～第25号(1914年～1917年)

『養秀』第26号～第37号(1917年～1936年)

社団法人養秀同窓会会誌

『養秀』第1号～第9号(1975年～1987年)

●解説

阪井芳貴(名古屋市立大学名誉教授)

●推薦

與儀 毅(養秀同窓会会長)

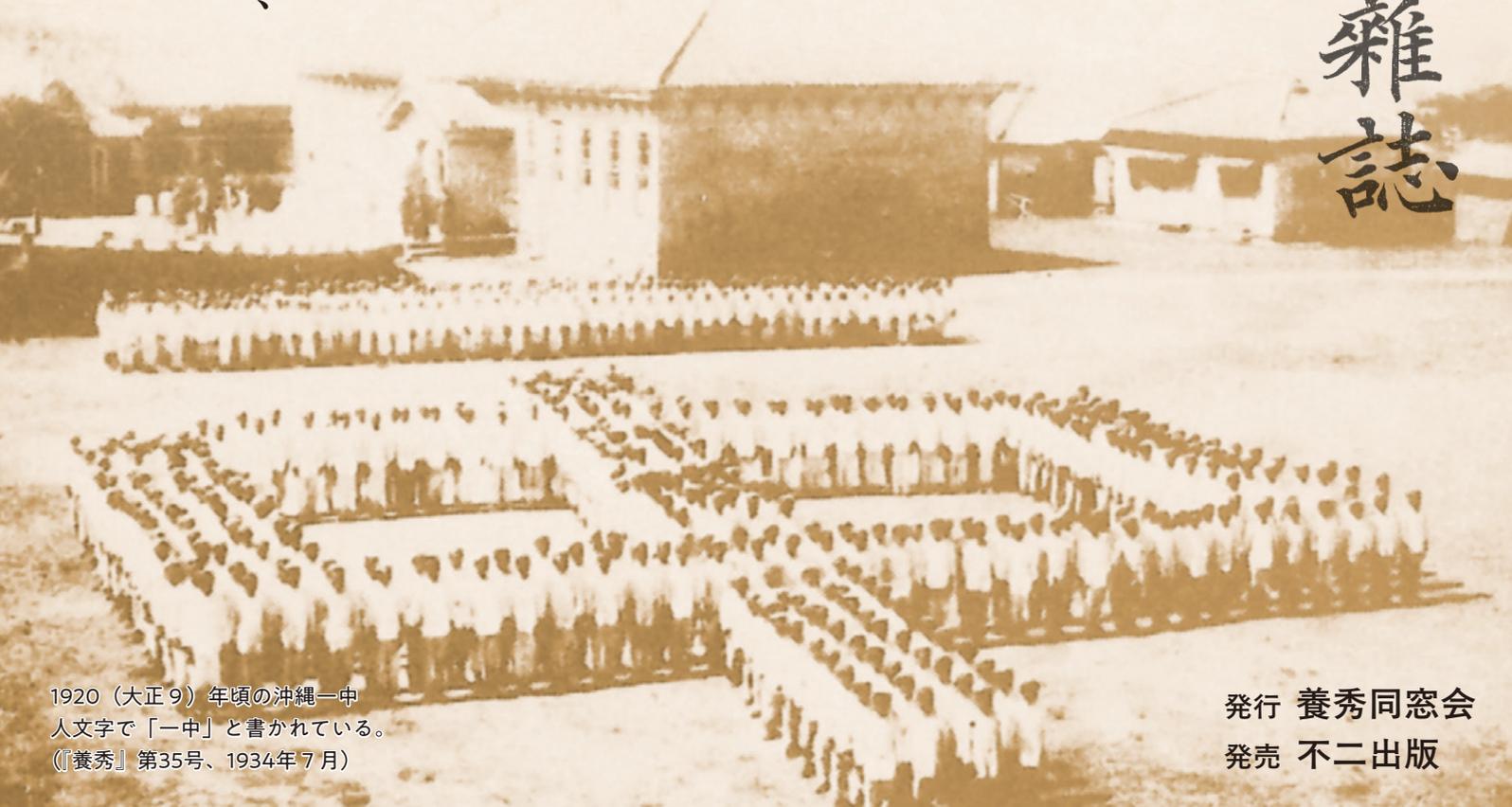
我部政男(山梨学院大学名誉教授／元琉球大学教授)

又吉盛清(沖縄大学客員教授)

●発行 一般社団法人 養秀同窓会

●制作・発売 不二出版

●揃定価 220,000円(本体200,000円+税10%)



1920(大正9)年頃の沖縄一中
人文字で「一中」と書かれている。
(『養秀』第35号、1934年7月)

発行 養秀同窓会
発売 不二出版

推薦のことば

学友会雑誌「養秀」の復刻によせて

一般社団法人 養秀同窓会会長 與儀 毅

かつて琉球王国に「国学」という最高学府があった。一七九八（寛政一〇）年四月、第二尚氏第十五代国王尚温によって創建された教育機関である。尚温王は国学開講にあたり、自筆の「海邦養秀」の扁額を掲げるとともに、「国学訓飭士子論」を訓じて、「こくがくしにくんちよくするのゆ」でもこれを登用、学問のない者は名門の子弟でも退ける」と諭し、門閥打破の革新的政治を行うことを声明した。

廃藩置県後、国学は県に移管され、「海邦養秀」の扁額とともに後の沖縄県立第一中学校（通称「一中」）に引き継がれ、沖縄の教育精神に深い影響を与えた。扁額は沖縄戦で焼失したが、一九五九（昭和三四）年九月、復元、後身の首里高等学校の体育館に掲示され、伝統的な校是として親しまれている。

学友会雑誌『球陽』（『学友會雜誌』↓『養秀』と改題）は一八九四（明治二七）年頃創刊され、一九三六（昭和一一）年三月発行の『養秀』第三七号までの三七冊と『養秀』創立四十周年記念号を合わせて三八冊が確認されている。三七年以降も刊行されたかは不詳である。この『球陽』は本県における学友会雑誌の嚆矢であり、全国的にも早い時期に属するといわれている。またこの学友会雑誌は全国の中学校、師範、高等学校の七四校に交換資料として寄贈され広く活用されていたことが『球陽』第一八号の「寄贈図書一覧」で分かる。

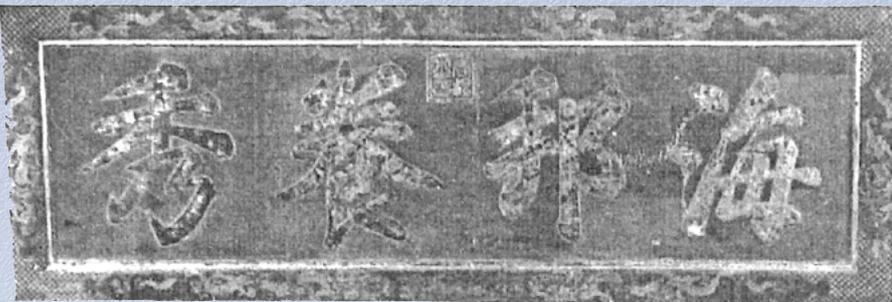
現在確認できる原本は二二冊。沖縄県内では当養秀同窓会（養秀文庫）に五冊、県公文書館に五冊、県立図書館に二冊、県立博物館・美術館に九冊が確認され、県外では国会図書館に一冊、東大明治文庫に三冊、その他一冊が分散所蔵されている。

このたび復刻・出版事業にノウハウを蓄積された、沖縄関係資料の復

刻に実績のある不二出版が、創刊から一三〇年、沖縄戦で一中に所蔵されていたすべての原本が焼失した本誌を、つぶさに調査し、三八冊のうち二二冊を発掘、復刻するに至った。この復刻・公刊が一中を継承する首里高等学校の歴史にとどまらず、近代沖縄を調査研究する資料の充実につながり、これを機に一六冊の欠号が一冊でも発掘されることに大きな期待を寄せるものである。不二出版のご尽力によって復刻されることに感謝し、満腔の敬意を表するものである。

二〇二四年一二月九日

（よぎ・つよし）



上：『養秀』の由来にもなった尚温王による「海邦養秀」の扁額。

下：1934（昭和9）年頃の校舎。

（共に『養秀』第35号、1934年7月）

戦前期の沖縄一中学友会雑誌（『球陽』『学友会雑誌』『養秀』）の復刻を喜ぶ

我部政男（山梨学院大学名誉教授／元琉球大学教授）

八〇年も前の沖縄戦争で湮滅したと思われる雑誌が、どこかで生き延びて、復刻にこぎつけるという。この快挙は、驚異であり同じく歓喜である。その困難な文化事業を成し遂げた不二出版の船橋治氏の功績に対して敬意を表したい。多くの研究者の必要とする基本資料を広く公開する姿勢に、私は、共鳴とある種の感動を覚える。不二出版の編集部では、かねてよりこの雑誌の存在と魅力に深い関心を持ち続けており、終戦直後にその雑誌の一部が占領軍の米軍によって収集され、沖縄の博物館に収められた事実を突き止めた。しかし、完全に全号が揃っているわけではなかった。欠号は全国の図書館の調査で収集し、完成度を高める。もちろん同窓会の協力も得た。しかし、完全なバックナンバーの収集は、それでも不可能であった。

人類は、自らの文化遺産を軽薄で愚かな戦争でもって破壊し、消滅させている。

およそどのような政治体制であれ、それを維持するには、継続的な補強ないし補充は必要である。時として国家権力は、学校教育をその補強の手段として利用し活用する。教育、宗教やイデオロギーも重要なその一翼を担う場合が少なくない。

近代日本の国民国家は、天皇制を中心にその歩みを推し進めてきた。軍人勅諭と教育勅語の思想と言葉の浸透が、そのことを示している。明治の琉球処分以後、遅れて参入する琉球・沖縄もその体制のなかに引き込まれる。山県有朋は、明治の沖縄統治に際して、国民国家の理想として、軍事と教育とを一体のものとして構想していた。その軍国主義的な思想は、以後の歴史に色濃く具体的に展開する。

皇民化、臣民化、国民化の言葉は、政治的指導理念のローガンとなる。その戦略の究極の目的は、言うまでもなく、支配や統治の対象としての国民を一体とし、把握しやすくするための方策にほかならない。その歩んできた歴史的事実を消し去ることはできないが、悲しいかな、その事実を生き生きと伝えるはずの具体的な資料の多くが、先の戦争で消滅した。

この度、沖縄一中の学友会雑誌が復刻の運びとなることは、沖縄近代史研究の資料に関心を持つものとして、私は静かな闘志が沸き立つように嬉しさを禁じ得ない。復刻に際しては、教育史を専門とする阪井芳貴氏による綿密な学術的検討が加えられ、詳細な解説が附されている。もちろんのことながら、これらの資料群は、沖縄一中（現首里高校）という一つの学校に限られてはいるが、社会的に活躍した人物の輩出を見ると、そのスケールの大きさに目を見張るものがある。私の関心から見ると『女人政治考』（一九二六年）を著した佐喜眞興英と佐喜眞の友人であった照屋亀三の文章に目を惹かれる。もちろん、若き日の伊波普猷、東恩納寛惇の文章もある。つとに広く知られている伊波の「図書館長伊波文学士中学時代の思出」も収録されている（『養秀』第三一号、『養秀』第三五号にも「在学時代の思ひ出」として再録）。その他の人物を挙げてみると下国良之助、眞境名安興、仲良良光、胡屋朝賞、仲宗根政善、新崎盛敏、島袋正次、照屋宏、池宮城積寶等の名前が眼に飛び込んでくる。青春のまつただ中であつた若者の文章は、沖縄人のアイデンティティー・クライシスに悩みながらも、希望に向けて立ちあがる姿を彷彿させる。大まかにみて、雑誌の記事は、軍および軍人に関する事柄が、比較的に多いように感じる。授業科目に軍事訓練が課されていたことにもよるが、時代の大きなうねりの黒い雲は、学園の上にも重くのしかかっていたのであろうか。次の時代を確実に予感させる。とはいえ、これらの校友会誌は確実に時代の空白を埋める貴重な資料であることに変わりはない。戦中・戦後の歴史との連結を期待しつつ、戦前期の記憶と映像の再現の試みを望む。

球陽 第十五號

論 說

○次代國民

五年級 山城長秀

大団圓々として笑うが如く恰も懐中に坐するが如き炎雲の時に當り。駒型を友として田疇に勉むる僕人。朝風濤々人の肌を刺すが如き極寒の時に際し。百折屈まず、夜々として學問に勉むるの士。なんすれど斯う過々たる。嗚呼野崎の身以て形を宇内に寓す能く幾何時ぞ。覺めては長き夢なりし呂生が邯鄲の假枕。實に敢果なきは人の命なる哉。然り人生は寔に朝露の如く、牽牛花の如し。されど想へ。男兒生れて地に落つべからず。願くは破天荒の大事業をなさざる可からず。よしんば斯かる大壯圖を成し能はずとするも我が精力のあらん限り。其職務は忠實たらざるべからず。故に農にまは。工にまは。將た前にまは。何ぞ其職業に上下貴賤の別あらんや。



○第十九回卒業證書授與式

輕風拂々として、野も出も霞縹引く春は衛生の廿八日、我級第十九回の卒業證書授與の盛典はあげられぬ。卒業には知事奈良俊男爵を初めとして、朝野の貴族紳士及び生徒の父兄等にして、午前十時開場の鐘聲高う響くや、生徒一同着席し、次に卒業の着席、次に一同敬聴し終るや、君が代の歌は唳然たる風琴の音と共に起るぬ。やがて校長は卒業證書を授與せられて後、

○告辭

一學年中の學事の報告をなし、且つ卒業生諸子の將來に就いて、懇切なる訓諭をなし給ひ、次に知事閣下は、懇篤なる告諭を垂れ給ひ、卒業大御氏は有益なる演説を試みられたり。夫れより、生徒總代の祝辭卒業生總代の答辭ありて、こゝに午前十一時式は終りを告げぬ。出づれば、口うらゝかに氣清く、校旗の蒼天高う仰らめくを覺ゆ。

本誌の記事は主として学生・教員たちによる創作と、学校の活動の記録の2種類に大別できる。左：学校の活動記録の例（『球陽』第17号、1908年9月）／右：学生の創作の例（『球陽』第15号、1906年11月）

講演

歐洲戰爭に就いて

漢那中佐の講話

歐洲戰爭に就て話をせよこのことでありますから、昨年歐洲を巡視したことを思つたまふに秀へもなくお話致します。私は昨年の六月に、歐洲巡視の途に就き、朝鮮滿洲を通つてハルビンに着きました。ハルビンは、日露戰爭の當時露國の軍需品のある根據地であつて、今も引き続き經營して居ます、又シベリヤ鐵道の重要な起點でありまして、ベトログラードから來た鐵道は、こゝで二つに分れて、一は東滿鐵道となり、更に朝鮮の鐵道に連絡をして、遂に釜山まで來て居る。今一つは滿洲斯德まで來て居るのである。而してこゝは將來滿洲を經營する上に於て、極めて重要な所であります。此處からベトログラードの汽車が一週間に一つしかありません。この汽車に乗つて、シベリヤ通過に約一週間費した後、ベトログラードに着きました。こゝは元はセントピーターズブルグと言つて居ましたが、之は獨逸名の様であるからと言ふので最近になつてベトログラードと改名したのであります。この一時を以ても露國人がいかにも獨逸に對して敵愾心を持って居るかと言ふことが分るのであります。約一箇月間此處に滞在して就に爭歐洲歐

講演

斥候は、派出せられたり。安次嶺の村の丘上に、我斥候の銃に黒帽を擡げたるを認む。敵兵發見！すはや、彼我の漸く接近せるを知る。小隊小學校裏山邊に、敵の斥候が白帽二三、蘇鐵、琉球松の陰に隠見するあり。

我斥候、穂波流るる甘諸畑に忍びて、彼を捕へんと巧む。敵の斥候、之を察して、悠々、糸滿街道を南に向つて引き上ぐ。我斥候、狭野に出

現す。敵の一隊、目前に横風せる丘間の林に潛み、我斥候を狙撃す。我が前兵、散開之に當る。

銃聲轟す。敵兵去る。我斥候は、宇梁原を経て、具志、高良に至る。敵の二個中隊は、ケタケ一

帯の天險を利し、野を解離して、我軍の前進を阻止せんと欲す。我前兵、勇往、直ちに糸滿街

道を通過せんと欲す。敵兵の猛火に逢ひて、具志の野に散る。第一中隊の本隊、その右翼とな

り、第二中隊は、左翼、高良の野に開く。硝煙銃聲、山野爲めに騒ぐ。敵兵屈せず。最後の争

闘、汗血下る。敵兵多からず。銃聲早く衰ふ。我兩翼の軍、之を突破せんとし、野を馳へ、險

を攀ぢんとす。敵兵之に應じ、他を顧るの餘裕なし。乃、我が本隊は、突貫直に具志を出で、糸滿街道を猛進す。戰鬪了る。打方止めの喇叭

は、兩軍の上に響き渡りぬ。垣花にて、戰鬪陣形に移りてより、こゝに二時間、時は、正に、午後一時なり。

○南軍記事 一月廿九日

南軍は二中隊より成れる假設敵にして、其の任務は、那霸附近まで進軍し來れる本隊が、北軍の猛烈なる抵抗に遭遇して、糸滿方面に退却するを掩護せんため、高良具志南方一帶の高地に據りて、死守して北軍の南下を防がんとするにあり。南軍想定の如し。

一、我軍は糸滿に向うて退却せんとす。二、第一第二中隊は具志、高良南方高地を占位し、本隊の豐見城西南部平野の通過を安全ならしむべし。

我軍は遂に糸滿を占領せし以來、殆んど無人の地を進むが如き勢を以て北進し來り、茲に一舉

↑沖繩一中では軍事教育も盛んにおこなわれた。右は卒業生であり、後に海軍少将・衆議院議員を歴任する漢那憲和(1879-1950)による講演の記録。左は学生たちによる発火演習の記録である。(右：『養秀』第26号、1917年12月。左：『球陽』第18号、1909年4月)

戦前期 沖縄一中 学友会雑誌集成

『球陽』『学友会雑誌』『養秀』全2回配本・全8巻・附録1

●底本

沖縄県立中学校／沖縄県立第一中学校学友会誌

『球陽』第14号～第21号(1905年～1912年)

『学友会雑誌』第23号～第25号(1914年～1917年)

『養秀』第26号～第37号(1917年～1936年)

社団法人養秀同窓会会誌

『養秀』第1号～第9号(1975年～1987年)

●解説(第1巻に収録)

阪井芳貴(名古屋市立大学名誉教授)

●推薦

與儀 毅(養秀同窓会会長)

我部政男(山梨学院大学名誉教授／元琉球大学教授)

又吉盛清(沖縄大学客員教授)

●発行 一般社団法人 養秀同窓会

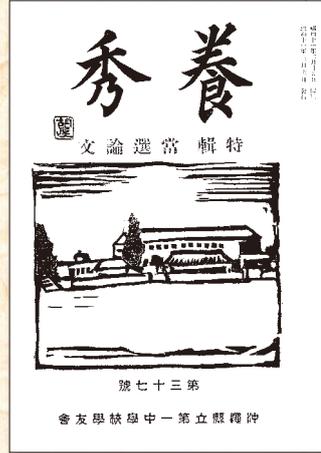
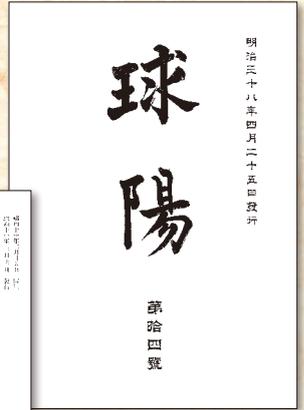
●制作・発売 不二出版

●体裁 A5判・上製・総約3,800頁

●価格 揃定価220,000円(揃本体200,000円+税10%)

→『球陽』第14号(1905年4月)表紙

本復刻版に収録する最も古い号。学友会誌が明治期から刊行されていたことが確認できる事例は全国的に見ても希少である。



←『球陽』第37号(1936年3月)表紙

本復刻版収録の最新の号。沖縄日報社の懸賞当選論文や卒業生による寄稿を多数掲載し、そのページ数は200頁に及ぶ。

収録内容・配本一覧

配本	復刻版巻数	収録内容	原誌発行年月	定価・ISBN
第1回配本	第1巻	『球陽』第14号～第16号	1905年4月～1907年9月	揃定価96,800円 (揃本体88,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8774-0 2025年3月刊行予定
	第2巻	『球陽』第17号～第18号	1908年9月～1909年4月	
	第3巻	『球陽』第20号～第21号	1911年7月～1912年9月	
	第4巻	『学友会雑誌』第23号～第25号	1914年9月～1917年1月	
第2回配本	第5巻	『養秀』第26号～第28号	1917年12月～1920年4月	揃定価123,200円 (揃本体112,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8779-5 2025年5月刊行予定
	第6巻	『養秀』沖縄県立第一中学校創立四十周年記念号、第29号～第30号	1921年6月～1924年4月	
	第7巻	『養秀』第31号～第34号	1925年5月～1929年7月	
	第8巻	『養秀』第35号～第37号	1934年7月～1936年3月	
	附録*	養秀同窓会会誌『養秀』第1号～第9号	1975年夏～1987年8月	

『球陽』第1号～第13号、第19号・第22号、『養秀』第33号は未見のため収録できなかった。『養秀』第36号は一部分のみ収録となった。

*附録のみ分売可。定価26,400円(本体24,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8785-6

好評関連資料

◎『占領期 奄美・沖縄の青年団資料集』

全4巻・付録1・別冊1 編集・解説 山城千秋・農中至

揃定価110,000円(揃本体100,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8529-6

B5判／B4判／A5判・上製・総約1900頁 2024年7月刊

米軍占領下の群島分割統治時代に発行された青年団の機関誌紙を復刻。

米軍の検閲下にあった青年団の運動方針や群島各地区の活動状況、文芸活動の実態のほか、奄美および沖縄群島の政治・生活・文化状況が読み取れる。

また『青年団だより』は、米軍基地建設と土地接収により働く場を奪われた青年たちを「移民青年隊」として海外に送出してきた沖縄産業開発青年隊が発行した機関紙であり、沖縄移民史上の資料としても貴重である。

いずれの資料も戦後奄美・沖縄の歴史、青年団運動、祖国復帰運動に関心を寄せる人々に新たな発見をもたらすはずである。

◎『旧制台北高等学校同窓会誌「蕉葉会報」』

全3巻 解説 河原功

揃定価66,000円(揃本体60,000円+税10%) ISBN978-4-8350-8565-4

B5判・上製・総1,074頁 2022年6月刊

旧制台北高等学校(1922年4月～46年3月)の卒業生及び在校生による同窓会＝蕉葉会(本会事務所は東京)の会報誌を復刻!!

戦前の植民地台湾に設置された旧制台北高等学校には開校当初から李登輝、武谷三男、川平朝清といった日本・台湾のエリートが集まり、卒業生は日本・台湾の政財界・教育・医療・文学などの広い分野で足跡を残し、戦後は国立台湾師範大学となった。

同窓会誌『蕉葉会報』は戦後の1961年5月に創刊、2013年6月の最終107号まで発行され、卒業生を通じた日台交流の様子を明らかにすると同時に、当時の旧制高校の生活習慣や学問の様子がうかがえる内容となっている。

振替 F T 〒112-0005
替 A E 東京郵便区水道2-1010
X L 4
0035598167004
001598167004
008167004
2167004
967004
47004
00854
4

不二出版

表示価格はすべて税込